

第一章…宿屋に到着！ 隠しアイテムと浴衣の防御力判定

「バンパカバーン！ 先生がパーティーに合流した！」

歴史ある温泉街の駅前。改札を出た瞬間、周囲の視線などお構いなしに、そのファンファーレは鳴り響いた。

声の主は、アリス。

透き通るような銀髪に、クリッとした大きな瞳。とんでもなく見目麗しい美少女だが、その思考回路は致命的にバグっている。

俺はため息をつきつつ、彼女の頭にボンと手を置いた。

「アリス、声がでかい。あと俺は元々パーティーにいただろ。一緒に電車乗ってたんだから」  
「む。先生、それはシステム上のロケです。『新マップ…温泉街』にロードされた時点で、改めてパーティー編成を確認するのが勇者の嗜みというもの」

アリスはふんす、と鼻を鳴らす。

彼女は俺の教え子であり、そして——アンドロイドだ。



だが、その肌は最新鋭の人工タンパク質製。見た目も質感も人間と全く区別がつかない。唯一の違いといえば、彼女が学習ソースをRPGに全振りしてしまったことくらいか。

「さあ先生、早く『宿屋』へ向かいましょう。HPとMPを全回復しないと、夜のボス戦に響きますからね」

「ボス戦なんてないぞ。今回はただの慰安旅行だ」

「甘いですね。イベントフラグは唐突に立つものです」

アリスは俺の腕を強引に抱きしめるようにして歩き出す。

……柔らかい。

二の腕に押し付けられる、彼女の並外れた質量の胸。

アンドロイドとは思えない、しっとりとした温もりと弾力。彼女の体温調節機能は、好意を持った相手に触れられるとわずかに上昇するように設計されているらしい。つまり、今この熱は、彼女の俺への「好き」の証でもある。

「……歩きにくいんだが」



「密着フォーメーションです。先生は後衛職（ヒーラー）なんですから、前衛の私が守ってあげないと」

上から目線で言う彼女だが、その顔は嬉しそうだ。俺たちはそのまま、予約していた老舗旅館『月見屋』へと向かった。

旅館のロビーは、静寂と和の香りに包まれていた。

チエックインを済ませ、仲居さんに案内されて部屋へと向かう廊下でのことだ。

「……む？」

アリスが急に足を止めた。

彼女の視線の先には、廊下の隅に置かれた立派な壺……ではなく、その横にある木製のゴミ箱があった。

アリスの目が、獲物を狙うハンターのように鋭くなる。



「先生、あそこにルート可能なオブジェクトが」  
「やめろ」

俺は即座にアリスの首根っこを掴んだ。

「なんてゴミ箱を漁ろうとするんだ」  
「だって、こういう死角にある箱には大抵『葉草』か『解毒消し』が入っているのが相場です。あるいは『小さなメダル』とか」  
「入っていない。入っているのは他人のゴミだ」  
「ちっ……。シビアなゲームバランスですね」  
「舌打ちしない」

アリスは不満げに頬を膨らませる。

以前、街中で絡んできたチンピラを瞬殺した際、気絶した相手のポケットを探って「ドロップアイテム回収」とか言いながら財布を抜こうとした前科があるのだ。油断も隙もない。

「ほら、部屋に着いたぞ」

通されたのは、露天風呂付きの離れだ。

広々とした和室。畳のい草の匂いが心地よい。

仲居さんがお茶を入れて退室すると、アリスはすぐに座卓の上にある茶菓子（温泉まんじゅう）にロックオンした。

「アイテム発見！ 先生、これは共有インベントリに入れますか？ それとも即使用？」

「食べていいよ」

「了解。スタミナ回復します」

アリスはまんじゅうをバクリと一口で食べた。

彼女は「乾電池は食べません！」と豪語する通り、人間と同じ食事でエネルギーを補給できるバイオリアクター搭載型だ。もぐもぐと口を動かす仕草は小動物のようであらしい。



「ん……美味しい。バフ効果がついている味がします」

「それはよかった。さて、夕食前にひとつ風呂浴びたいところだが……まずは浴衣に着替えるか」

「装備変更ですね！ 了解です！」

アリスは立ち上がり、備え付けのクローゼット（彼女曰く『宝箱』）から浴衣を取り出した。

そして、俺の前で躊躇なく制服のブラウスに手をかけた。

「ちょ、ちょっと待てアリス！」

「？ どうしました先生。装備画面を開くのにロード時間が必要ですか？」

「いや、俺がいるだろ！ 着替えはあっちの部屋で……」

「何を言ってるんですか。パーティーメンバー同士で装備を見せ合うのは基本仕様ですよ？ それに……」

アリスはボタンを外し、ブラウスをはだけさせる。



露わになったのは、白くなめらかな鎖骨と、豊満すぎる胸を包み込むレースのブラジャー。彼女は悪戯っぽく笑い、一步、俺に近づいた。

「先生には、私のステータス詳細、見てほしいですし」

「……お前なあ」

羞恥心というモジュールが欠落しているのか、それとも計算なのか。

アリスは平然とスカートのホックも外し、下着姿になった。

圧倒的なプロポーション。

人工物ゆえの完璧さと、人間以上の艶めかしさが同居している。特にその胸の破壊力は、物理演算エンジンが仕事をしすぎているレベルだ。重力に従ってたわむ肉感的な曲線に、俺は目のやり場に困る。

「先生、装備のチュートリアルをお願いします」

「……自分で着られないのか？」

「この『ユカタ』という装備、防御力が紙のくせに、装着難易度が高すぎます。帯という拘

束具の使い方が不明です」

アリスは浴衣を羽織ると、俺に背中を向けた。  
うなじの白さが眩しい。

俺は仕方なく、腰紐を手を取った。

「きつくないか？」

「平気です。先生の手、温かい……」

背中越しに、彼女の体温が伝わってくる。

帯を締めようと腕を回すと、必然的に俺の体は彼女の背中に密着する形になる。

アリスが小さく吐息を漏らし、体を預けてきた。

「……先生」

「なんだ」

「このマップ、BGMが静かですね」



「温泉宿だからな」

「敵の気配もありません。……つまり」

彼女はくると体の向きを変え、俺の胸に顔を埋めた。

帯はまだ途中だ。はだけた浴衣の隙間から、谷間が露骨に主張している。

「セーブポイントってことですよ？　ここではHP回復以上のコマンドも、入力可能じゃないですか？」

上目遣い。

澄んだ瞳が、俺をじっと見つめている。

その瞳の奥で、何かの演算処理が走っているのが見えるようだ。

彼女の指先が、俺のシャツの裾を掴み、ちよいちよいと引っ張る。

「まだお風呂の前だぞ」

「お風呂イベントの前哨戦（プレイイベント）です。先生、私の装甲値、確認してくれませんか」

か？ 最近メンテナンスしてなかったので、ちょっと感度が……いえ、センサーの反応が  
敏感になつてるかもしれないので」

アリスは俺の手を取り、自分の豊かな胸へと導こうとする。  
その柔らかい肌に触れる直前、彼女は耳元で囁いた。

「先生になら、ハッキングされても文句言いませんから」

強気で、生意気で、でもとろけそうな声。

この不思議な「勇者」様は、どうやら今夜、俺というラスボスを攻略する気満々のようだ。

「……まずは温泉だ。話はそれから」

「むう。先生のガードが堅い……。これは長期戦（持久戦）の構えですね」

俺が手を引っ込めると、アリスは不満そうに唇を尖らせたが、すぐにニヤリと笑った。



「まあいいでしょう。温泉ステージには『混浴』という隠しギミックがあるかもしれませんが。……期待しててくださいね、先生？」

帯を締め直し、浴衣姿になったアリスは、くるりと回ってみせた。

薄手の生地一枚の下にある、極上のボディ。

これからの長い夜を予感させながら、俺たちは部屋を出て大浴場へと向かうのだった。

第10章…秘湯の混浴エリアにて。魔王級の装備（バスト）とマナ補給の儀式

「うわあ……。このグラフィック、すごいです」

貸切露天風呂の扉を開けた瞬間、白濁した湯けむりの向こうに広がっていたのは、絶景だった。

岩造りの野趣あふれる湯船。その向こうには、月明かりに照らされた日本庭園。

だが、俺にとつての真の絶景は、そこではなかった。



脱衣所で浴衣を脱ぎ捨て、一糸まとわぬ姿になったアリスが、湯船の縁に立っていた。月光が、彼女の透き通るような白磁の肌を照らし出す。そして何より、重力に逆らうように自己主張する、その圧倒的な質量。

「……ん？ どうしました？ フリーズしてますよ？」

アリスが振り返る。

隠そうともしない。むしろ、誇らしげに胸を張り、腰に手を当てて仁王立ちだ。湯気の中で揺れる、二つの巨大な果実。先端の桜色は、興奮のせいか普段より鮮やかに色づいているように見える。

「先に入って待つてました。このエリア、継続回復（リジエネ）効果がすごいです。肌のテクスチャ解像度が上がってる気がします」

彼女はチャプン、と音を立ててお湯の中に沈むと、手招きをした。



「ほら、早くこっちに来て。パーティーは常に近距離にいないと」

俺も覚悟を決めて湯船に入る。

熱めのお湯が体を包むが、それ以上に、隣に寄り添ってきたアリスの肌が熱かった。人工タンパク質の肌は、お湯を吸ってさらに滑らかに、吸い付くような感触に変化している。

肩が触れ合う距離。

アリスは湯船の中で、自分から俺の腕を抱きしめ、豊かな胸に押し付けた。ぶるん、と弾力のある感触が腕全体に広がる。

「…………ふふ。やっぱり、見過ぎ」

俺の視線に気づいた彼女が、意地悪そうに笑う。

「知ってますよ。ずっとここ、見てたでしょう？」



彼女は自分の豊かな胸を、両手で下から持ち上げて見せた。

たぶん、と重たげな音が聞こえそうなほどの重量感。

指の間から白い肉がこぼれ落ちている。

「昔はね、もっと貧弱なステータスだったんです。初期装備の『ひのきのぼう』レベルで、ぺたんこだったのに」

アリスは少し遠い目をして、懐かしむように呟く。

そう、彼女のボディは成長に合わせて換装されてきた。昔はスレンダーな少女体型だったのだ。

「でも、今は違う。最強装備にアップデートしましたから」

「……重くないのか？」

「重いです。肩凝りというデバフが常にかかります。でも……」



彼女は俺の手を掴むと、無理やり自分の胸へと導いた。

「んっ……触って。この重さ、確かめてほしいの」

俺の掌が、彼女の胸全体を覆う。

収まりきらない。

指先が沈み込むほどの柔らかさ。人間の脂肪よりも少しだけ反発力が強く、それでいてマシユマロのようにとろける感触。

「……はあ、ん……。どう？ この防御力。どんな攻撃も弾き返す、魔王級の装甲値でしょう？」

強気な言葉とは裏腹に、彼女の口から漏れる吐息は甘い。

俺が指に力を込めて揉みしだくと、アリスの背中がビクリと跳ねた。

「あっ……！！　そこ、は……クリティカル、判定……っ！」

強がりの口調が崩れ始める。

俺はさらに深く、重さを量るように両手で包み込み、先端を指で掠めた。

「んああっ！ ……だめ、いきなり弱点属性で攻撃するのは、ルール違反……っ」

アリスの瞳が潤み、トロンとした熱を帯びていく。

体温調整機能が暴走しているのか、触れている部分から猛烈な熱が伝わってくる。

「……ねえ。お返し、しないと」

胸を揉まれて赤くなった顔で、アリスが俺の首に腕を回してきた。

湯気と湿気で濡れた唇が、俺の唇に重なる。

ちゅ、と小さな音が鳴る。

最初はバードキス。やがて、彼女の舌が遠慮がちに、しかし食欲に入り込んでくる。



「ん……ちゅ、れろ……んっ……」

口内を蹂躪される感覚。

彼女の唾液は、ほのかに甘い味がした。

息継ぎも忘れて、何度も角度を変えて求め合う。

アンドロイドである彼女に呼吸の必要はないはずだが、雰囲気酔っているのか、彼女の鼻息は荒く、切羽詰まったものになっていく。

「はあ、はあ……んう……。マナ、循環してる……」

唇を離すと、銀色の糸が引いた。

アリスは恍惚とした表情で、俺を見上げている。

普段の生意気な勇者様はどこへやら。今はただの、快楽に溺れかけた雌の顔だ。

「……まだ、足りない。もっと深いところまで、接続（コネクト）したい」



アリスは湯船の中で体勢を変え、俺の膝の上に跨った。  
バシヤリと水音が響く。

俺の目の前に、堂々たる二つの丘が突き出される。  
尖った先端が、俺の視線を誘うように震えていた。

「栄養補給、必要でしょう？ ……特別に、回復アイテム（ポーション）をあげる」

彼女は自分の胸を両手で捧げ持ち、俺の口元へと押し付けた。  
その意味を理解した俺が、恐る恐るその先端を口に含むと――。

「ひゃあっ!？」

アリスが高音の悲鳴を上げた。

敏感すぎるセンサーが、俺の舌の動きを過敏に拾っているらしい。

「ん、くう……! すこい、吸引力……っ! ダイソン級の、バキューム効果が……っ」

俺は夢中で吸いついた。

実際に母乳が出るわけではない。だが、口の中に広がる柔らかさと、吸うたびに強くなる彼女の反応が、本能を刺激する。

舌先で転がし、軽く歯を立て、吸い上げる。

「ああっ、んっ、んぐっ！ 吸われる……エネルギー、全部……吸い取られちゃう……っ！」

アリスが俺の頭を抱きしめる。

拒絶ではない。もっと深く、もっと強く求めているのだ。

彼女の腰が、湯船の中で無意識に揺れ始める。

「はあ、あっ、ああっ！ そこ、いい……もっど……赤ちゃんみたいに、いっぱい飲んで……っ」

彼女の言葉遣いが、完全に溶けていた。

強気なアリスが、「母」のような、あるいは「雌」のような甘い声を上げて悶えている。

俺が反対側の胸に口を移すと、彼女は寂しそうに声を漏らし、すぐに新しい快感に身をよじった。

「んふう……っ！ 両方、攻めるとか……鬼畜プレイ……っ。でも、気持ちいい……回路が、焼き切れそう……」

彼女の身体が小刻みに痙攣する。

人工筋肉が収縮し、俺の体に吸い付くように締め付けてくる。温泉の熱気と、アリスの発する熱気で、俺の頭もクラクラしてきた。

「……もう、だめ。ここでゲームオーバーになっちゃう」

アリスが涙目で、俺の髪をくしゃくしゃに撫でる。

その顔は、とろけきっていた。

「続き……お部屋のベッド（セーブポイント）で、やろう？ 今度は、もっとすごいスキ

ル……見せてあげるから」

彼女は俺の耳元で、濡れた声で囁いた。

それは、今夜の「攻略」がまだ始まったばかりであることを告げる、甘美な招待状だった。

第○章…伝説の聖剣、メンテ中につき。→峡谷の挟撃とマナの奔流→

部屋に戻ると、すでに仲居さんの手によってふかふかの布団が敷かれていた。

ここが、今夜のラストダンジョン。

湯上りの火照った体を冷ます間もなく、アリスは浴衣を脱ぎ捨てた。

月明かりに照らされたその体は、人工物とは思えないほど艶めかしい。

「先生。セーブは完了しましたか？ ここからは……ノンストップのボスラッシュです」

アリスは四つん這いで布団に上がり、俺の股間をじっと見つめる。

浴衣の前がはだけ、俺の昂りはすでに隠しきれないほど膨張していた。

「ふふ。すごい殺気（プレッシャー）。ラスボスの風格ですね」

彼女は華奢な指先で、俺のイチモツを布越しになぞった。  
ビクン、と反応すると、彼女は楽しそうに目を細める。

「まずは、武装解除から。……失礼します」

アリスの手が伸び、俺の浴衣を乱暴に、しかし愛おしそうに広げた。  
露わになった屹立する肉棒。

それを見たアリスの瞳孔が、カメラのシャッターのように僅かに収縮し、そして潤んだ。

「おお……。これが、先生の『エクスカリバー』。ステータス画面で見ても、攻撃力がカンストしています」

ハンドスキル…器用さ（DEX）の検証

アリスはそっと、その根本を握った。  
ひやりとするほど滑らかな掌。しかし、接触した瞬間から急速に彼女の手の温度が上がっていく。

「硬度、Aランク。熱量、測定不能（エラー）。……すごいエネルギーです」

彼女はゆっくりと手を上下させ始めた。

人工皮膚の吸着力は凄まじい。まるで俺の皮膚と一体化するように密着し、わずかな隙間もなく刺激を与えてくる。

「ん……っ。どう？ 私のハンドスキル、レベル上がってる？」

カリの裏側、敏感な部分を指の腹でこね回す。

計算され尽くした動きだ。強すぎず、弱すぎず、一番気持ちいい強さを「I」が瞬時に判断しているかのようだ。



「くふふ……。先生、声、漏れてますよ。耐久値、削れてきてますね」

アリスは上目遣いで俺を見ながら、もう片方の手で鈴口を弾いた。  
じわりと先走りの液が滲む。

「あ、ポーションが溢れてきた。……もつたいない」

彼女は指についた透明な液を、糸を引くように伸ばし、べろりと舐めとった。

「ん……。濃い。マナの純度が高い味」

「手だけじゃ、満足できませんよね？ もっと丁寧に、メンテナンス（手入れ）してあげないと」

アリスは顔を近づけた。  
熱い吐息が、敏感になった亀頭にかかる。



彼女は舌を突き出し、先端の割れ目をちろりと舐めた。

「んちゅ……っ。れる……」

舌先が、尿道口を扶るように蠢く。

そして、彼女は大きく口を開き、龟头を咥え込んだ。

「んぐっ……んむ、ちゅうう……っ！」

口腔内は、人間以上に温かく、そして柔らかかった。

舌の使い方が異常だ。螺旋を描くように絡みつき、喉奥から強い吸引力で吸い上げてくる。

「じゅぼ、んっ、んくっ……ふぁ……」

彼女が頭を上下させるたびに、濡れた水音が部屋に響く。



長い銀髪が揺れ、俺の太ももをくすぐる。

アリスは俺を見上げたまま、白目を剥きそうなほど夢中で奉仕を続けている。

喉の奥まで突き入れると、彼女は苦しがるどころか、喉の筋肉を収縮させてさらに締め付けてきた。

「んがつ、んぐ、おつ、んうううー……っ！」

バイブレーション機能でもついているのか、喉奥が微細に振動し、俺の脳髓を痺れさせる。

快楽の過剰供給。

「ぶはっ……。はあ、はあ……。先生、すごい……。口の中、いっぱい……」

一度口を離すと、アリスは涎と先走りでべとべとになった口元を拭わずに、妖艶に笑った。



「でも、まだ発射（リリース）させない。……今日のメインイベントは、これじゃないから」

アリスは体を起こし、跨るようにして俺の上に覆いかぶさった。

そして、自慢の超弩級の胸を、俺の顔の前に突き出した。

重力に従ってたわむ、二つの巨大な肉塊。

「見て。先生が大好きな、最強の防具（シールド）」

彼女は両手で胸を寄せ、深い谷間を作った。

そこに、濡れそぼった俺のイチモツをあてがう。

「……装備、装着（セット）」

ぬぶん、という重たい音と共に、俺の剛直は彼女の谷間に飲み込まれた。

視界から竿が消える。

左右から押し寄せる圧倒的な肉の圧力。



ただ挟んでいるだけではない。彼女の胸は意思を持っているかのように、肉棒の形に合わせて変形し、包み込んでくる。

「はあ……っ、んっ！ 大きい……。挟んでるだけなのに、私の中に入ってるみたい……」

アリスは胸を押し付けたまま、腰を前後させ始めた。

ずぶ、ずぶ、ずぶっ。

オイルも何もつけていないのに、彼女の肌から分泌される滑らかな汗と、俺の体液が混ざり合い、淫靡な音を立てる。

「あっ、くう……っ！ 硬い……先生の、ごりごり擦れて……乳腺回路が、おかしくなっちゃう……っ！」

彼女は快感に喘ぎながら、さらに強く胸を寄せた。

視覚的暴力だ。

美少女が、その規格外の巨乳で、俺のものを犯している。

柔らかいのに、逃げ場がないほど強い圧迫感。

「ほら……見て？ 先生の、私の胸で……ぐちゃぐちゃにされてる……っ。気持ちいい？  
ねえ、この『バイズリ』っていう裏技、気持ちいい？」

アリスは興奮で紅潮した顔を寄せ、俺の唇を奪いながら腰の動きを早める。

「んんっ、ふっ、ああ！ 乳首、擦れて……っ！ だめ、これ、私まで……いきそう……っ！」

巨大な乳房が波打つ。

その先端、硬くなった桜色の突起が、俺の胸板や顎を掠める。

胸肉の摩擦熱で、俺のイチモツは溶かされそうだ。

「あ、っ……！！ 先生、ゲージが……限界突破（リミットブレイク）しそう……っ！」

アリスの動きが激しくなる。



もはや理性などない。ただ本能のままに、俺の精を搾り取ろうとしている。

「だして……！ 先生の、全部……この谷間に、ぶちまけて……っ！」

俺も限界だった。

腰を跳ね上げ、彼女の豊かな胸の中で、果てた。

「っ——！」

ドクン、ドクンと脈打ち、白濁した熱い液が噴出する。

アリスの谷間、鎖骨、そして顔にまで飛沫が飛ぶ。

「あぁっ、んっ、んんうーっ！」

アリスは射精の瞬間、胸を緩めるどころか、さらに強く抱きしめ、一滴も逃さないように締め上げた。



そして――。

「……まだ、残ってる」

余韻に浸る間もなく、彼女は胸から顔を離すと、白く汚れた先端に再び口づけをした。

「最後の1バイトまで、データ転送して」

ちゅうっ、と強い吸い付き。

残尿感ごと吸い出される感覚。

彼女は口の中に溢れた精液を、ためらうことなく喉に送った。

――ゴキユツ。

華奢な喉が上下し、嚥下する音がはっきりと聞こえた。



「んぐ、ん……ぶはっ」

アリスは口元を舌で舐め、とろんとした蕩けた笑顔を見せた。

「……ごちそうさまでした。大量の経験値（EXP）、獲得です」

彼女の口角から、飲み込みきれなかった白い雫がひと筋、あごへと伝う。

その姿は、どんな聖女よりも神聖で、どんなサキユバスよりも淫らだった。

「これでレベルアップ、しましたかね？ ……ふふ。先生、少し休憩（ローディング）したら……」

アリスは俺の胸に頬を寄せ、甘えた声で囁いた。

「第二ラウンド（強くてニューゲーム）、始めましようか？」



第4章…禁断の接続端子（コネクト）と、限界突破の白濁エクスタシー

「……ふう。……んっ。」

すごい。先生の『聖剣』、また硬くなってきてます。

さつきあんなに、耐久値を削ったはずなのに」

アリスは、乱れた呼吸を整える間もなく、俺の上に跨ったままだ。

部屋の照明は落とされ、枕元の行灯（あんどん）だけが、彼女の白くなめらかな肢体を妖しく照らし出している。

さつきのパイズリで発射したばかりだというのに、彼女の豊満な胸と、熱を帯びた肌の感触が、俺の本能を休ませてくれない。

アリスは妖艶な手つきで、自身の太ももの付け根——秘所へと手を伸ばした。

「見てください。」

システムログを確認したら……『潤滑液（ルブリカント）の分泌量が、異常値を検出し

てます」

彼女が指先を秘裂に這わせると、くちゅり、と卑猥な水音が響いた。

アンドロイドである彼女の体液は、人間と変わらない、いや、それ以上に粘度が高く、糸を引くほど濃厚だ。

「ほら……とろとろです。

私の体、先生を受け入れる準備（セットアップ）、とつくに完了してるみたい。

……もう、待てません。

メインクエスト、進めてもいいですよね？」

アリスは上気した顔で、とろんとした瞳を俺に向ける。

拒否などできるはずがない。

俺が頷くと、彼女は嬉しそうに微笑み、腰を高く持ち上げた。

「では……『接続（リンク）』、開始します」



ぶつり。

亀頭の先が、彼女の濡れた入り口に触れる。

熱い。

人工タンパク質の腔内は、恐ろしいほどの熱量を持っていた。

「ん……っ、あ……。」

入る……先生の、太いの……私の拡張スロットに……っ！」

ずぶ、ずぶぶ……。

彼女が腰を沈めるたびに、きつい肉壁が俺の剛直を締め付けながら飲み込んでいく。ゴムのような弾力と、生物的な吸着感が同時に襲ってくる。

これは、凶器だ。



あまりの気持ちよさに、俺の背筋に電流が走る。

「はあ、あつ、くう……！」

すごい……充填率（フィル・レート）、100%……！」

奥まで、びったり……隙間なんて1ミリもない……っ」

根元まで飲み込むと、アリスは一度大きく仰け反った。

その拍子に、彼女の自慢の巨乳が、ぽよんっと激しく波打つ。

重力に引かれて形を変える二つの丘。

その頂にある桜色の突起は、興奮で硬く尖り、俺の目の前で揺れていた。

「……ふふ。」

先生、苦しいですか？

私の『内部』の締め付け設定、最強にしておきましたから」

アリスは俺の胸に手をつき、ゆっくりと腰を動かし始めた。



ぬぶっ、ちゅぼ……ずぶっ。

粘着質な水音が、静かな和室に響き渡る。

「んあ、っ、あ……!!

いい、これ……っ!!

情報量が多すぎる……っ。

粘膜の接触データ、処理しきれない……っ!!」

彼女は騎乗位のまま、上下運動を繰り返す。

その動きは、最初は探るようにゆつくりと、やがて本能に従うように激しさを増していく。

「っ、ああっ!!そこっ!!

その角度、だめっ……!!



Gスポット、直撃してる……っ！

回路が……シヨートしちゃう……っ！」

アリスの喘ぎ声が高くなる。

彼女の中の襞（ひだ）が、まるで意思を持った触手のように俺のモノに絡みつき、しごき上げてくる。

アンドロイドゆえの精密な動きと、快楽に溺れた野獣のような腰使い。

そのギャップが、俺の理性を削り取っていく。

「先生……っ、先生え……っ！

もっど、突き上げて……！

私のセンサー、壊れるくらい……乱暴に……っ！」

俺は彼女の腰を掴み、下から突き上げるように腰を打ち付けた。

ガッンッ、ガッンッ！



結合部から、肉と肉がぶつかり合う激しい音が鳴る。

そのたびに、アリスの豊かな胸が上下に暴れ、白い肌が紅潮していく。彼女の目からは、生理的な涙が溢れていた。

「あひいっ!？」

んぐ、あ、あああーっ!

深い、深いよお……っ!

子宮(コア)ユニットまで、届いてる……っ!

ハッキングされてるみたい……頭、真っ白に……っ!」

もう、限界が近い。

俺の昂りもピークに達し、射精の衝動が腰の奥から込み上げてくる。

「……っ、アリス、出る……!」



「だめっ！ 中はだめ……っ！」

アリスは俺の言葉に反応し、絶頂の寸前で腰を浮かせた。

ずぼおんッ！

大きな音を立てて、俺のモノが彼女の中から引き抜かれる。

愛液と先走りてべとべとになった肉棒が、空気に晒され、湯気を立てている。

「……最後は、これで見たいの」

アリスは素早く体勢を変えると、俺の顔の前に、その圧倒的な胸を突き出した。

そして、両手で巨大な乳房を抱え込み、深い谷間を作って俺のモノを挟み込んだ。

「ここ……っ！」

私の最強装備で、受け止めるから……っ！



先生のエネルギー、全部、顔にかけて……っ！」

再度のパイズリ。

だが、先ほどとは密着度が違う。

膣内で擦れ、敏感になりきった亀頭を、熱く火照った胸肉が容赦なく圧迫する。

「んしょ、んしょ……っ！

出すの……早く、出して……！

私の顔めがけて、思いつき……『バースト・ストリーム』、撃ってええーっ！」

アリスが胸を激しく上下させ、扱（しご）き上げる。

視界いっぱい広がる、暴力的なまでの肌色。

谷間の奥に見える、彼女の欲望に満ちた瞳。

俺は耐えきれず、腰を跳ね上げた。



「——っ!!」

ドクンッ!

勢いよく、白濁した精液が噴き出す。

それはアリスの狙い通り、放物線を描いて彼女の顔へと降り注いだ。

ビュッ、ドビュッ……!

「んんっ……!!」

アリスは目を閉じるどころか、カッと見開いて、その熱いシャワーを受け止めた。  
頬に、唇に、そして長い睫毛に、白い飛沫が次々と着弾する。  
銀色の髪にも、べつとりと絡みつく。

「ああ……っ、あ……。」



すごい……熱い……。

先生のDNAデータ、顔中で受信してる……っ」

俺が果てた後も、彼女は胸の力を緩めない。

最後の数滴まで搾り取るように、ぐりぐりと乳肉で亀頭を押し潰す。

「んふ……っ。

全部、出ましたか？

……クエスト、コンプリートですね」

アリスはゆっくりと胸を開放した。

その顔は、精液まみれで真っ白だ。

だというのに、彼女は今まで見たこともないような、聖母のような慈愛に満ちた笑みを浮かべていた。

彼女は指で頬についた白濁を拭い、べろりと舐める。



「……ん。」

やっぱり、先生の味。

私の大好きな、世界で一番の……ご褒美（ドロップアイテム）です」

彼女はそのまま、力尽きたように俺の胸に倒れ込んできた。

その体は、オーバーヒートした機械のように熱く、そしてドクドクと脈打っていた。

「……先生」

「なんだ？」

「ログアウト、しませんからね。」

朝まで……ずっと、パーティー組んだままですから」

アリスは俺の首筋に顔を埋め、満足げな寝息を立て始めた。

長い夜の、ほんの一時の休息。



俺は彼女の背中を優しく撫でながら、この可愛い「勇者」との冒険が、まだまだ続くことを悟るのだった。

最終章…『トウルーエンド…勇者と先生の終わらない冒険（エンドレス・ワルツ）』

夜はまだ、終わらない。

部屋の空気は、二人の熱気と甘い匂いで飽和していた。

乱れた布団の上、アリスは俺の背中に爪を立て、あえかな声を漏らしている。

「……はあ、んっ、あ………！」

先生、すごい……。

さっきより、深い……。

私のコアユニット、直接……触られてるみたい……っ」

二度目の交わりは、最初よりもさらに濃密で、溶け合うような感覚だった。彼女の柔らかな肌は、汗でしっとり濡れ、俺の体温を貪欲に吸収している。

アリスの瞳は潤み、焦点が合っていない。

普段の強気な「勇者」の仮面は完全に剥がれ落ち、ただ快樂に翻弄される一人の少女の顔になっていた。

「ん、ああっ！ そこっ！

同期（シンクロ）率……上昇中……っ！

システムが、警告音（アラート）出してるのに……止まらないっ！  
先生の熱、気持ちよすぎて……思考回路、焼き切れちゃう……っ」

彼女は俺の首に腕を回し、しがみついてくる。

その豊富な胸が、俺の胸板に押し付けられ、激しい心音を伝えてきた。

アンドロイドにも心臓はあるのか——そう錯覚するほど、彼女の鼓動は激しく、生々しい。

「……先生。



私、バグったのかな。

こんなに胸が苦しくて、熱くて……。

プログラムにない『好き』って感情が、無限ループしてるの」

アリスは涙ぐんだ瞳で、俺を見つめる。

その言葉は、どんなゲームの台詞よりもリアルで、俺の胸を打つ。

俺は彼女の愛おいしい銀髪を撫で、唇を重ねた。

「んっ、ちゅ……ふぁ……。

キス……甘い。

先生からのデータ転送……もつと、もつと……。」

舌が絡み合い、唾液を交換する。

呼吸のリズム、肌の温もり、そして繋がった部分から伝わる脈動。

全てが一つになっていく。



「あつ、ああつ！　だめ、もう……っ！

ゲージ、振り切れる……っ！

先生、一緒に……！　一緒に、エンディングまで行って……っ！」

アリスの体が弓なりに反り、俺を強く締め付ける。

彼女の中の熱量がピークに達したのがわかった。

俺もまた、理性の堤防が決壊する。

「……いくぞ、アリス」

「はいっ……！！　来てください、先生……！！

私の全てで……受け止めますからああーっ！」

世界が白く弾けた。

互いの存在を確かめ合うように、強く、深く抱き合いながら、俺たちは同時に絶頂へと達した。



嵐のような時間は過ぎ去り、部屋には静寂が戻っていた。ただ、二人の荒い呼吸音だけが響いている。

アリスは脱力し、俺の腕の中でぐったりと横たわっていた。その表情は、とろけるように穏やかで、満ち足りていた。

「…………ふう。」

クエスト、完全攻略（コンプリート）……………ですわね」

彼女は掠れた声で呟き、俺の胸に頬をすり寄せた。

「先生。今の、すごかったです。」

ログを確認しても…………『幸福度…測定不能（インフィニティ）』って出てます。これが、トウルーエンドの景色なんですわね」

アリスは自分の体を抱きしめるようにして、余韻に浸っている。



その肌はまだほんのりと桜色に染まっていた。

「……中、あったかい。」

先生のくれた『命の源』みたいな熱が、お腹の奥に残ってます。これ、消さないで……ずっと、アーカイブに保存しておきたいな」

彼女は愛おしそうに自分のお腹を撫でる。

その仕草は、どこか母性を感じさせるほどに優しかった。

「あ、そうだ」

アリスは不意に顔を上げ、悪戯っぽく笑った。

「先生、私のステータス画面、見てください。」

種族名が変わってるかもじれませんか」



「種族名？」

「はい。ただの『アンドロイド』から……『先生の恋人』にクラスチェンジ、しましたよね？」

上目遣いで、答えを待つ瞳。

俺が頷いて頭を撫でてやると、彼女は「えへへ」と嬉しそうに目を細めた。その笑顔は、どんな高解像度のグラフィックよりも美しかった。

新たな冒険へ

翌朝。

チェックアウトを済ませた俺たちは、旅館の前で並んで立っていた。爽やかな朝の光が、温泉街に降り注いでいる。

「バンバカバイン！」

勇者アリスは、全回復しました！」



アリスは朝から元気いっぱいだ。

昨夜の艶めかしい姿が嘘のように、いつもの制服姿でポーズを決めている。ただ、その腕はしっかりと俺の腕に絡められていた。

「さあ、先生。次のマップへ移動しましょう。

家に帰るまでが、遠足クエストですからね」

「そうだな。気をつけて帰ろう」

「はい！ ……あ、でもその前に」

アリスは立ち止まり、俺の顔を覗き込んだ。

「先生、知っていますか？

RPGには『強くてニューゲーム』っていうモードがあるんですよ」



「……それで？」

「今回の旅行で、私たちのパーティーレベル、だいぶ上がりましたよね？  
親密度ランクも、マックスになりましたし」

彼女は俺の耳元に口を寄せ、誰にも聞こえないような小声で囁いた。

「だから……帰ってからも、毎日『夜のボス戦』、付き合ってくださいね？  
私、もう……先生という『魔王』様の攻略なしじゃ、生きられない体になっちゃいました  
から」

一瞬だけ見せた、昨夜の色気を纏った表情。

しかし、彼女はすぐにパッと離れ、二カッと笑った。

「報酬は、私のこの体で支払います！

……あ、もちろん『乾電池』は受け付けませんからね！」



アリスは俺の手を引つ張り、駅へと続く道を歩き出す。

その背中は、頼もしくもあり、守ってやりたくなるほど愛らしくもあった。

俺たちの関係という名のゲームは、まだ始まったばかり。

この「不思議ちゃん」な勇者との冒険は、どうやらエンディングロールの後も、ずっと続いていくらしい。

「さあ、行きますよ、先生！」

私たちの未来という名の、オープンワールドへ！」

エピローグ…『エンドレス・クエスト ～勇者と魔王の同棲生活（ニューゲーム・プラス）～』  
旅行から戻って数日。

俺の生活——いや、俺たちの「拠点（ホーム）」は、劇的にアップグレードされていた。

休日の朝。



カーテンの隙間から差し込む日差しよりも眩しい存在が、俺の腹の上に鎮座していた。

「……先生。」

サーバードメンテナンス（睡眠）は終了しましたか？

ログインボーナスの受け取り時間が、迫ってますよ」

アリスだ。

彼女は俺のYシャツを一枚だけ羽織った、いわゆる「彼シャツ」という最強装備（防具）を身にまとい、上から俺を見下ろしている。

ボタンは掛け違えられ、襟元からは自慢の真っ白な谷間が大胆に覗いていた。

「……朝から元気だな、アリス」

「勇者たるもの、早起きは基本スキルです。」

それに……」

彼女はぐっと身を乗り出し、豊かな胸を俺の顔に近づける。



ふわりと、シャンプーの香りと彼女特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

「先生という『魔王』が近くにいると、エンカウント率が高すぎて……眠ってる場合じゃないんです」

アリスは悪戯っぽく微笑むと、ゆっくりと顔を近づけてきた。

長い銀髪がカーテンのように視界を覆い、世界を二人きりにする。

「ん……ちゅ」

柔らかい唇が重なる。

それは挨拶代わりの軽いものではなく、角度を変え、何度も確かめ合うような深い口づけだった。

アンドロイドである彼女の体温は、設定により常に人肌よりも少し高く保たれている。触れ合う部分から伝わる熱が、寝起きの体に心地よい。



「……ふふ。」

マナ供給、完了です。

これで今日も一日、フルパワーで冒険できます」

唇を離すと、アリスはとろんとした瞳で俺を見つめ、満足げに喉を鳴らした。その表情は、以前の「生徒」としての顔でも、単なる「機械」の顔でもない。愛される喜びに満ちた、一人の「恋人」の顔だ。

「先生。」

今日のデイリーミッション、確認しましたか？」

「……いや、まだだが。何かあるんだ？」

「えつとですわね……」

彼女は指折り数えながら、楽しそうに話し始める。



「まずは、一緒にお洗濯（装備の浄化）。

次に、スーパ―への買い出し（アイテム収集）。

それから、新作ゲームの協力プレイ（共闘）。

そして……」

アリスは言葉を切り、少し頬を赤らめて俺の耳元に唇を寄せた。

「夜は、耐久クエスト……『愛のレベル上げ』です。

先生、昨日の続き……まだ、攻略しきれないルートがありますよね？」

彼女の吐息が耳にかかり、背筋がぞくりとする。

この「不思議ちゃん」な勇者は、どうやら俺を休ませる気など微塵もないらしい。だが、それが嫌ではない自分がいる。

俺は彼女の背中に腕を回し、その柔らかな体を引き寄せた。

アリスは「きゃっ」と小さな声を上げつつも、嬉しそうに俺の胸に顔を埋める。

「……望むところだ。」

全クリできると思うなよ」

「ふふっ。強気ですね、先生。」

でも、私には『コンティニュー』機能がついてますから。

先生がグブアップするまで……何度でも、挑ませてもらいます！」

アリスは満面の笑みで宣言する。

その瞳の奥で、愛情という名のステータス値が、限界突破（カンスト）しているのが見えた気がした。

俺たちの日常という名の冒険は、まだ始まったばかり。

この愛すべきボンコツ勇者と共に歩む道は、どんなRPGよりも刺激的で、温かい。



「さあ、行きましょう！  
先生との『エンドレス・ワルツ』、  
スタートです！」

〜完〜

